

日本  
音楽  
集団

第一回演奏会

第十九回芸術祭参加

1964年11月17日(火) 午後7時開演 ◇於 丸の内第一生命ホール

## ■ 日本音楽集団第一回演奏に寄せて

清瀬保二

近頃、邦楽器を用いた創作曲の発表が盛んになってきた。邦楽界はもちろん洋楽作曲家の関心も漸次高くなってきているが、この会の創作曲もまた洋楽界の人達のものである。

とにかく、一国の音楽が、例えば日本のように邦楽と洋楽と二つに別れていることは、本来からみて本当ではない。しかしこれは、現在洋楽が国際的価値をもっている以上、残念ながらいわゆる後進国と目される国の運命である。しかし、邦楽は、洋楽にただ模倣的に追いつくことではあるまい。とって長い伝統のもつ特異性を強調するのみでも、問題は解決しないであろう。ここにたいへんやっかいな、また困難な問題がある。

聞くとところによると、近来、邦楽と洋楽との接点は何かということが問題になっているというが、こうした考え方は、一つの進歩ではないかと思う。というのは、邦楽と洋楽の長所あるいは存在理由を認めているところから、こうした考え方が起こると思うからである。邦楽がある後進性をもっている点があるとしても、進歩ということが、ただ洋楽の真似をすることではなく。また邦楽器をつかって洋楽らしく演奏することでもないことが漸次認識されてくるのではあるまいか。もちろん邦楽器の改良や演奏法の拡大の必要はあろうが、ただ直訳的な考え方から出発したら、洋楽の表面的な模倣が新しいとか進歩ということにはならないと思う。しかし問題は簡単ではないし、長い模索を覚悟の上で、いろいろの試み、また多くの作曲家、演奏家の協力が必要である。この集団の発足をよろこぶと共に、期待するところは、たぶんそうした意図を考えてのことだと推察し、持続する努力と模索である。

菅野浩和

伝統というものは、温存しているだけでは発展はあり得ません。今日的な形に、再創造し、新しい生命を賦与させてゆくことが必要なのです。

しかし私がこう唱えるまでもなく、こうした仕事はずいぶん行なわれてきました。洋楽畑の人と邦楽畑の人とを問わずに……。ですが伝統に基づいた新しい創造という仕事は口で唱える題目としてはりっぱですが、実際の仕事としてはたいへん難しい仕事を含んでおり、そのためか、仕事がたくさん行なわれているわりに、成果はそう多くないと思えず、ことに邦楽畑での実りが少ないようです。

こういう時に、邦楽畑と洋楽畑の人たちが、和楽、洋楽という壁を意識しないで一つのグループを作って、新しい日本音楽の創造と発表を行なおうとする「日本音楽集団」の発足は、たいへん期待が感じられるものです。これから第1回の発表会があるので、どういふ成果を欠せてくれるかについては、何ともいえませんが、同人の顔ぶれから見て、非常に新鮮で、旺盛な意欲が感じられます。邦楽器の表現の限界の拡大、合奏時の和声や対見法の工夫、洋楽器との結合のさせかた、伝統的素材（民謡など）の、再構成のしかたなど開拓すべき問題はたくさん残されています。このグループの活動が5年続き、10年たったところに、それらの問題点に着々と解答が与えられ、伝統音楽の新しい形での再生生命化が結実するようになれば、これはまったくすばらしい足跡というほかありません。

## ■ 第一回の演奏会にあたって

我が国にヨーロッパの音楽が伝えられたのはやっと百年前の事です。その頃のヨーロッパは、すでにバロックもクラシックも卒業し、ロマンティズムが欧歌され、めざましい国民音楽が各国で花を咲かせる時代でありました。セシル・グレイの論法をかりれば、音楽がすべての芸術に君臨する世紀の真只中であつたわけです。

したがって、明治以降の日本が欧化されながら進化して行つたその後の百年は、世界の文化史の中で音楽芸術がおとろえながら女王の地位を他の芸術——例えば、バレエや映画に譲り渡して行つた歴史と背中合わせするという、悲劇的、いや喜劇的な様相を持っていると解釈する事もできます。

この自からの進化とヨーロッパの音楽芸術の衰退という、相反する潮流に巻き込まれて日本の現代音楽は、その本来の歴史も土壌も見失つたまま、いかに唐突な転進を繰り返している事でしょう。借りもののヨーロッパの尺度を性急に日本の音楽にあてはめようとしたこの失敗を反省し、私達の国に華々しく音楽の花を咲かせるためには、たとえ百年という長い時計の歯車を止めても、国民音楽の畠を拓き施肥しなければなりません。この緑美しく水清らかな風土と同じく、永い鎖国の歴史の中に沈潜してはいるものの、誇るべき固有の音楽的土壌はすでにあるのです。

日本音楽集団結成の目的は、そのような素朴な開墾者たる事にあります。尺八や箏や三絃のように、優秀な植物を大きなアンサンブルの田畑に植えかえよう、そのためには品種改良にも耐え、温室からも出よう、皆様方の肥料もうんと吸収しようと思うのです。

西欧の音楽はかつての大らかな楽興の時を捨てて、今やますます個人的な暗い淵に沈潜しようとしています。私達は中国の音楽生活の推移などともならみ合わせて、ここに重大な東洋の可能性を感じています。英人セシル・グレイの芸術循環論はヨーロッパの宿命ではあつても、新しい東洋には通じません。一つの文化圏が行きづまった時には、なかなか自力では歴史を変える事ができないようです。飛鳥やヘレニズムの故事が教えるように、今アジアやアフリカのどこかで偉大な文化の出現が若返りと共に期待されるのです。

私達はいわゆる邦楽にしても洋楽にしても、音楽本来の姿のものは、すべて肯定します。その反面、四疊半的なものや効果に随した音楽不在のえせ芸術は徹底的に否定しなければなりません。私達がこの集団の理念を論じ合つていた時誰かがいいました。

それは音楽のルネッサンスだと——

1964年11月

日本音楽集団同人一同

# 曲 目

## 1 尺八三重奏曲 / 清瀬保二 作曲

第一楽章 アレグロ ノン トロッポ。三部形式。短かいコーダがつく。

第二楽章 レント。やや伝統的な感じの主題とその発展。

第三楽章 第一楽章よりやや速い。三部形式。

3本の尺八のために作曲され、本年5月東京尺八三重奏団によつて初演された。曲は3楽章からなり、いずれの楽章にも五音音階（陽旋法）が用いられている

## 2 千鳥の曲 / 二代吉沢検校(1800~1872)作曲

序奏——前唄——手事——後唄。

近代箏曲中の名曲として知られている。前唄は“しほの山、さしでの磯に鳴く千鳥、君が御代をば八千代とぞ鳴く”（古今集）。後唄は“淡路島、通う千鳥の鳴く声に、幾夜寝ざめぬ須磨の関守”（金葉集）。

## 3 弦と日本楽器のための協奏曲 三木稔 作曲

陰旋によるアダジオ——陽旋によるアレグロ。

この曲では三つの異った次元でそれぞれ対立する六つの要素が、弁証法的に発展するための支柱になっている。それは拡大された陰と陽、緩と急、そして二つの楽器群の存在である。特に擦弦楽器が持続的で明確な縦横の線を持つのに比べ、我々の民族楽器ではいわば打楽器的な特性や、ユリ・コキに代表される不確定な要素の勝る事が最も重要なポイントとしてとらえられている。

## 4 協奏三章「京琴」 / 元橋康男 作曲

一章 モデラート——アレグレット。複合三部形式

二章 アンダンテ、エスプレシーヴォ。二部形式

三章 ラルゴ——アレグロ。序奏付き複合二部形式（舞曲風）。

京琴は京都に生まれた琴類の一つで、鉄線の弦の張られた非常に珍しい楽器である。年代は不明だがかなり古い時代のもので、現在ほとんど使われていない。この曲は京琴のあやしく表情豊かな音色を生かし、全体をゆったりした流れのなかにまとめたもの。

## 5 日本楽器による子供のための組曲 / 長沢勝俊 作曲

第一章 軽やかにのびのびと

第二章 ゆったりと、歌う感じで

第三章 遊戯唄風におどけて

第四章 しずかに子守唄風に

第五章 激しく律動的に

日本楽器を媒体として活き活きとえがきだされた子供の世界である。コマ・ソんで育つた現代の子にも新鮮な感動を与える力を持っている。それは我々の祖先が伝承し、また常に新しく生みつけてきた民族の歌であるともいえよう。

## 6 くるだんど / 三木稔 作曲

美しい南の島である奄美には為政者と労働者の激しい相克の歴史が秘められている。奴れい達は黒い雨雲の出現を見て「黒(くる)だんど」と呼ぶ。雨中でも止むことない作業の苦痛を予見した切実な声である。

この曲は彼等が働き、嘆き、うさ晴らしをした、その言葉や旋律の断片をかりて、能動的な日本の音楽をめざす讃歌にしたものである。



# PROGRAMME

1 TRIO FOR SHAKUHACHI / by YASUJI KIYOSE

- I Allegro non troppo
  - II Lento
  - III Faster than 1st movement
- Composed by Ditonic

2 CHIDORI NO KYOKU / by YOSHIZAWA KENGYŌ  
(music of Provers) (1800 ~ 1872)

Introduction — Former song — Interlude — Latter song  
Duetto by KOTO. This is one of most famous compositions for KOTO,  
in 19th century.

3 CONCERT FOR STRINGS AND JAPANESE INSTRUMENTS /

by MINORU MIKI

- I Adagio by Ditonic
- II Allegro by Pentatonic

4 COCERTO FOR KYŌGOTO / by YASUO MOTOHASHI

- I Moderato—Allegretto
- II Andante espressivo
- III Largo Allegro

5 SUITE FOR CHILDREN BY JAPANESE INSTRUMENTS /  
by KATSUTOSHI NAGASAWA

- I Leggiero
- II Andante cantabile
- III Allegretto scherzando
- IV Dolce cantabile (as a "Lullaby")
- V Agitato ritmico

6 "KURUDANDO" / by MINORU MIKI

(Balladé for Japanese instruments and mixed chorus, by melodies of AMAMI Islands)



村岡 実 (尺八)

大正12年宮崎県に生る。昭和16年都山流入門。民謡を菊池淡水師に学ぶ。昭和34年より都山流を離れ、独自の尺八音楽に専念。昭和36年より39年9月の間東京尺八三重奏団を結成、主催。主にレコード・放送・映画音楽などの尺八音楽開拓に専心している。



杉浦 弘和 (三絃)

昭和10年生り。昭和28年芸大邦楽科入学。昭和32年芸大邦楽科研究科入学。長唄東音会発足と同時に入会。昭和33年芸大邦楽科副手現在に至る。昭和34、36年邦楽コンクール作曲部門第二部一位となる。主要作品「三種三絃あためゝ習作」「琴・三絃による二重奏」ほか。



宮田 耕八朗 (尺八)

昭和13年東京都に生る。昭和36年宮城室内楽団入団。東京尺八三重奏団を結成。演奏活動および後進の指導にあたる。



山内 喜美子 (箏)

石川県金沢市に生る。5才の頃より生田流箏曲を学ぶ。昭和27年芸大邦楽科卒業。宮城道雄、宮城喜代子の各氏に師事。ジャズ・映画音楽などのあらゆる分野に箏をとり入れ、レコード・放送などで活躍している



横山 勝也 (尺八)

昭和9年静岡県に生る。祖父篁村、父蘭敵に琴古流を学ぶ。昭和31年上京、福田蘭童、海童宗祖氏に師事。昭和35年NHK邦楽育成会卒業。昭和36年東京尺八三重奏団を結成。昭和37年世界平和友好祭ヘルシンキ大会に参加。昭和39年現在代々木に稽古所を開くかわら演奏活動をしている。



上 参郷輝美枝 (箏)

北海道小樽市に生る。6才の頃より山田流箏曲を学び、後生田流に転向。昭和31年芸大邦楽科卒業。宮城道雄、宮城喜代子、宮城衛、松尾恵子の各氏に師事。昭和34年ウイーンでの世界青年平和友好祭に参加し、民族音楽コンクールに入賞。



山田 美喜子 (びわ)

台北州立台北第一高等女学校卒業。同校家政科および研究科卒業8才より箏(生田流)を10才より筑前びわを学ぶ。のち宮城道雄門人となる。現在宮城社師範。さらに箏美会を結成し、門人養成にいそむかたわら、女学生時代に学んだバイオリン・オルガンを基に現代びわを研究。その奏者としてTVその他で活躍している。



宮本 幸子 (十七絃)

北海道旭川市に生る。旭川にて小田桐雅香氏に師事。昭和31年上京。正派邦楽会に入門。昭和35年邦楽コンクール演奏部門3位に入賞。昭和39年第一回カイロ国際民族芸術祭参加。現在正派邦楽会師範。正派合奏団員、正派音楽院助教。



### 田村拓男 (打楽器)

昭和10年島根県に生る。芸大委託生として2年間修業。マリンバを朝吹英一氏、打楽器を小宅勇輔氏に、ピアノを滝崎鎮代子氏に師事。元東フィル団員。昭和37年1月独奏会を開く。現在東京マリンバグループ会員。東京放送管弦楽団所属。



### 元橋康男 (作曲)

昭和11年東京に生る。日大芸術学部卒業。貴島清彦、村田英夫、伊藤隆太の諸氏に師事。才29回新人演奏会に作品「木造による歌とピアノのための断章」を発表して楽壇にデビュー。主要作品・交声曲「勸進帖」幻想曲「日本の庭」交声曲「マリモア」伝説一「尺八とピアノの為の冥想曲」等



### 長沢勝俊 (作曲)

大正12年東京に生る。昭和18年日大芸術学部中退。昭和24年人形劇団アークに入団。人形劇の作曲を始める。後青年の会に入会。大沢和子・清瀬保二氏に師事。昭和37年人形劇フェスティバル参加のため渡欧。ヨーロッパ各国を遊学。主要作品「合唱曲鹿踊りのはじまり」「フルートとピアノのためのソナタ」他



### 横山千秋 (指揮)

昭和6年 青森市に生る。昭和31年芸大卒業。昭和27年より斎藤秀雄氏に指揮法を学び、日本青年交響楽団。群馬フィルハーモニー交響楽団を指揮。昭和36東京混声合唱団を指揮しデビューし、労音・放送などで活躍。その後フリーとなり、邦人作品の演奏、紹介に努めている。日本合唱指揮者協会理事。



### 三木 稔 (作曲)

昭和5年 徳島市に生る。昭和30年、芸大作曲科卒業。池内友次郎、伊福部昭の両氏に師事。主要作品 「トリニタ・シンフォニカ」「バリトン独唱、男声合唱およびオーケストラのためのレクイエム」「管弦楽のためのコントラスト」「合唱による風土記—阿波」 オマレッタ「鶏亭主」等



### 鞍掛昭二 (ディレクター)

昭和8年東京生れ。昭和32年芸大楽理科卒業。総合的な音楽活動をめざしている ツイス五重奏団ディレクター。リズムの会会員。

内藤克洋 (マネージメント) 東京音楽社社長 雑誌「合唱界」「音楽生活」を主宰。



## 全音の楽譜と楽器

● 全音音楽譜出版社 支店/東京・大阪・福岡・札幌

日本の生んだ世界のマーク

**SONY®**

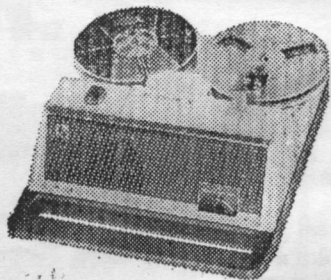
いちばん進んだ電子頭脳テープコーダーです

**ソニオマチック5** ファイブ

〈新発売〉 むずかしさを追放した若い人の小型高級機

●ソニオマチック5(ファイブ)

**TC-135** 現金正価 **¥15,800** 定価 ¥16,600



日本音楽集団事務所 東京都新宿区百人町2-211 大和ビル 東京音楽社内

TEL (368) 8060 (362) 3098